



## 第19回 3年ぶりの沖縄調査に参加して ～辺野古新基地建設をめぐる現在を知る

人権擁護委員会委員 小塚 陽子 (58期)

2023年1月27日から30日にかけて実施された人権擁護委員会沖縄問題対策部会による沖縄調査に参加した。この調査は、新型コロナウイルス感染症問題のため、やむなく中止となっていたが、今回、3年ぶりに実施されたものである。

### 1 沖縄県庁にて

まず、前半は、知事公室辺野古新基地建設問題対策課の方から、辺野古新基地建設問題の現状について話を聞いた。県が辺野古新基地建設に反対している主な理由は、国土面積の0.6%の沖縄に米軍専用施設の70.3%が集中しているため、普天間基地を辺野古へ移設しても沖縄の過重な基地負担は軽減されないこと、辺野古・大浦湾の豊かな自然環境保全の観点からも、7割を超える県民が反対の意思を示していることにある(同課作成の資料による)。また、建設予定地の軟弱地盤の問題、県による公有水面埋立変更承認申請不承認処分とその理由、不承認処分後の国との間の訴訟の状況等についても説明を受けた。

後半は、戦没者の遺骨収集に関する状況がテーマであったが、県の子ども生活福祉部保護・援護課の方によると「沖縄における第二次世界大戦時の戦没者は19万人弱と推計されており、推計値を基にただけでもなお2700柱を超える戦没者の遺骨が眠っている(令和3年現在)。しかし、遺骨収集は、遺族や戦争体験者の高齢化により情報収集が難しくなっていることに加えて沖縄の高温多湿気候のため、遺骨からDNA鑑定に必要な資料を抽出することも困難な問題に直面してい



辺野古高台から辺野古埋立区域を臨む

る」とのことである。この問題については、辺野古新基地建設埋立についての賛否にかかわらず、県民の中には戦没者の遺骨が含まれる土砂を使用すること自体に抵抗がある人もいる。実際の遺骨収集作業は主に県内外の個人のボランティアによって行われている現状にあるところ、県民の気持ちを尊重した実践につなげていく体制が十分に整っているのだろうかと考えた。

### 2 辺野古現地へ

沖縄県庁から辺野古に移動し、沖縄の防衛力強化の監視活動を続ける奥間政則氏から、辺野古新基地建設の現状と問題点についてレクチャーを受けた。新基地計画の埋立区域は軟弱地盤であるし、新基地の滑走路地下を貫く辺野古断層と大浦湾に突き出す護岸に沿って海底に迫る楚久断層がいずれも活断層である可能性があり、専門家からも「震度2以下の地震でも構造物の安定を保てないおそれがある」と指摘されている。そのうえ、その2本の断層に挟まれたエリアに辺野古弾薬庫が位置しており、もし地震が起こったら、弾薬庫内の有害な薬品が漏出したり爆発事故が起こる等の危険はないのだろうかと思ろしくなった。

その後、奥間氏の案内で、辺野古浜に降りた。目の前には美しい海、砂浜にはサンゴのかけらが打ち上げられている。しかし、左の方に目を向けると、様相が一変し、金網のフェンスが伸び、その内側で埋立工事が進められている。また、キャンプ・シュワブの第2ゲートの前を経て、瀬嵩燈台跡にのぼり、埋立区域を俯瞰すると、巨大なテトラポット(通常は2トンであるが辺野古では20トン相当のものが使われている)が敷設されている状況が目に入る。悔しい思いが込み上げた。

### 3 最後に

今回、初めて沖縄調査に参加したが、現地を訪れ、辺野古新基地建設の現状の一端を見ることができた。ここで進められていることは、防衛政策の問題など日本がどこへ向かおうとしているのか～という問題と繋がっている、東京で暮らす私たちもきちんと向き合う必要があると感じた。